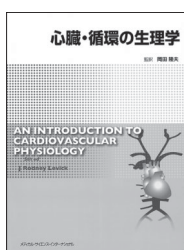


書評

[評者]

水野 篤

聖路加国際病院
循環器内科



心臓・循環の生理学

岡田隆夫 監訳

A4変形 頁400 図256 写真11

定価 7,980 円(税込)

[ISBN978-4-89592-689-8]MEDSi 刊

「生理学って面白いけど、覚えることが多いねんなあ……」「いまさら生理学……しかも心臓だけ？」

僕がこの本の題名から受けた印象である。それだけ、学生時代の生理学のイメージが強い。研修医時代を一般病院で過ごし、臨床一直線の僕にとって、生理学のイメージは学生時代の丸暗記の試験や、ほとんど読まなかった分厚い教科書である。手にとって本を開く。なるほど……。僕はようやく生理学ということの意義を理解した。

3つの点でこの本を一読されることをお勧めする。1点目はありきたりであるが、非常に読みやすい。各章での学習目標や要約は極めて理解しやすく、各章での分量もやはり臨床医向けの分量で多すぎない。

2点目は、臨床医にとって生理学を学ぶことは必要不可欠である。特に僕のように一般病院での初期研修、後期研修を行った臨床一筋の医師は、自分の体感した正常な状態を基準として日常診療に至っているため、科学的な視点が欠落していることが多い。例えば心筋梗塞では、壊死心筋のすぐそばの心室内腔には非常に豊富な酸素があるのに心筋が壊死してしまう。この現象を我々臨床医はどのように感じているのであろうか。いつの間にか一般の人と同じレベルでの判断で、血管が詰まるから壊死するということだけに帰結していないだろうか。プロとして事実の認識の1つとして、拡散の限界性などをこのような観点から解説されると「ぐう」の音もでない。この本はこのような臨床の一

側面を生理学的視点から解説してくれる。

3点目は、時代のニーズの変化である。紙面の関係で長くは書けないが、昨今、日本は初期研修制度にあやかっの臨床大ブームと言ってはやや言葉が稚拙であるが、臨床研究が躍進し、若手臨床家にとっても非常にチャンスの多い時代である。しかし、臨床研究も解剖や生理といった基礎医学に基づいた知識を踏まえて行われなければ、ただの事実の羅列に過ぎない解析である。科学者としてのスタンスをも感じられる医療従事者という職業のすばらしさは、このような基礎医学の学習によっても増幅される。

「心臓・循環の生理学」は、基礎研究のみを行う医師を対象としたものではない。臨床のプロとなるための最低限の知識がこの中に盛り込まれている。この本のおかげで、生理学はまさに我々一般病院に勤務する臨床医が臨床医であるための最低限の基礎知識であることを認識した。学生向けの本だと推測していたが、この本は臨床家向けに記載されている。第1章に書かれているように、「木を見て森を見ない」基礎というイメージより、「森を見て木を見ない」我々自身に気づかされた1冊である。学生にはもちろん基礎知識固めとして読んでいただきたい。しかしできれば、学生実習・初期研修でかなりの臨床経験に暴露された熱い医師や指導医の先生方にも読んでいただけたらなあとと思う今日この頃である。